

仙台市文化財調査報告書第117集

富沢遺跡

——第33次発掘調査報告書——

1988年3月

仙台市教育委員会

富沢遺跡

— 第33次発掘調査報告書 —

1988年3月

仙台市教育委員会

序

口頭、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

近年、富沢地区におきましては区画整理事業、高速鉄道建設が完了し、仙台市の南部の拠点となる副都心として位置付けられ、急速に開発・市街化が進んでいるところであります。こうした動きの中で、富沢遺跡は発掘調査が進むにつれて、縄文時代から近世にかけて、連續と人間の生活の痕跡が残されていることが分かってまいりました。特に弥生時代以前の水田跡の解明や、それより古い縄文時代の人間生活の痕跡の発見、また、多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡との関連などといった大きな成果が得られております。今回の調査におきましては、宮城県教育委員会の御協力をいただき、弥生時代から平安時代までの水田跡や、古くから「宮田」と「鳥居原」という字境をなしていたという水路が発見され、富沢遺跡を解明するための一助となる成果が得られております。こうした、文化遺産を市民の宝として、永く後世に継承していくことは、これから、「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。今後とも市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

1988年3月

仙台市教育委員会
教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は共同住宅（マンション）建設に伴なう宮沢遺跡の第33次発掘調査報告書である。
2. 調査の主体者は仙台市教育委員会であるが、発掘調査にあたって宮城県文化財保護課の応援をいただいた。（担当職員：齊藤吉弘）
3. 15b層出土木製品の樹種に関してパリノサーべイ橋高橋利彦氏に御教授いただいた。
4. 本書の文草、実測図中の方位は真北で統一してある。
5. 本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原、1973）を使用した。
6. 遺構平面図中に任意に単点を設けて標高を明示するようにしてある。
7. 報告書作成のための整理、本文執筆、編集は主浜光朗が行ない、陶磁器の鑑定は佐藤洋が行なった。
8. 本遺跡の位置と環境については、宮沢遺跡第15次調査報告書『宮沢—仙台市文化財調査報告書第98集』と重複するため本書では削除した。そちらを参照していただきたい。
9. 本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

調　　査　要　項

遺　　跡　名　称：宮沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-301、宮城県遺跡登録番号01369）

所　　在　地：仙台市長町南三丁目9-5

調　　査　主　体：仙台市教育委員会

調　　査　担　当：仙台市教育委員会文化財課調査係

（担当職員：主浜光朗）

調　　査　期　間：自1987年8月25日　至1987年10月31日

調査対象面積：約744m²（発掘面積約255m²）

調　　査　参　加　者：大規明美、小沼ちえ子、佐藤敏幸、佐野弘（以上整理も含む）

赤川千広、阿部いしよ、阿部孝一、阿部清太郎、阿部すえ子、阿部美代寿、阿部みのる、宍戸豊子、岩井レイ子、小川良子、菊地芳郎、黒田ふさ子、今野淑子、笹川光夫、佐藤幸子、佐藤朋弘、鈴木つや子、高橋とみ子、高山宣子、高田美由紀、早坂みづえ

調　　査　協　力：住友不動産株式会社、フジタ工業㈱

本文目次

序

例言

調査要項

I. 調査に至る経過	1
II. 調査の方法と経過	2
III. 基本層位	2
IV. 検出構と出土遺物	5
(1) 2層上面検出遺構	5
(2) 5層検出水田跡	9
(3) 8層検出水田跡	11
(4) 10層検出水田跡	12
(5) 12層検出遺構	13
(6) 13層出土遺物	15
(7) 15a層検出水田跡	15
(8) 15b層検出水田跡	17
(9) 17層検出水田跡	19
(10) 19層検出水田跡	20
V. 審査とまとめ	21
1. 出土遺物	21
2. 検出遺構	22
3. まとめ	25

I. 調査に至る経過

富沢遺跡は、仙台市南部、郡山低地の後背湿地に位置し、主として近世～弥生時代の水田跡を包蔵する遺跡として登録されていた。遺跡の所在する地区周辺は、近年、仙台市内の副都心として土地区画整理事業後、高速鉄道（地下鉄）の開通、都市計画道路の整備と、急速に開発が進んでいる地域である。その中にあって富沢地区は、区画整理時の盛土によって覆われてしまい、痕跡の姿を垣間見ることができず、遺跡の内容の解明が急がれているところである。

昭和62年5月13日付けで、住友不動産㈱から富沢遺跡内の、仙台市長町南三丁目9-5にかかる地区、744m²について、共同住宅（マンション）建築に係る発掘届が提出された。仙台市教育委員会文化財課では、開発地が遺跡の範囲内に位置しており、工事により遺跡が損われることが明らかになったことから、住友不動産㈱と協議の上、記録保存を図ることを目的とした発掘調査を行うこととなった。発掘調査は昭和62年8月25日より開始された。



II. 調査の方法と経過

調査対象面積は、744m²である。発掘区はマンション建築部分に盛土の崩落を考慮し、また排水溝部分を確保するため隣地との境界から0.7mに設定されていた東及び西壁部分を境界から各々2.5m～3m離して設定した。面積は約255m²である。

重機により盛土及び旧水田耕作土を排除し、その後人力によって遺構確認作業を行なった。旧水田耕作土排除中に溝跡が検出された。5層上面で平安時代以降の水田跡、8層、10層上面で平安時代の水田跡、12層上面で平安時代の溝跡が検出された。15a層、15b層、17層、19層上面で水田跡が検出された。

調査中、遺構測量の際には、国家座標の任意の点（国家座標X=197.558km、Y=+4,200km）を原点とし、国家座標の方向を基線として、東北線を縦軸に、東西線を横軸に3mグリッドを区画して基準線を設定した。平面図は1%の図面を作成した。構造断面図、上層断面図については1%の縮尺を用いた。

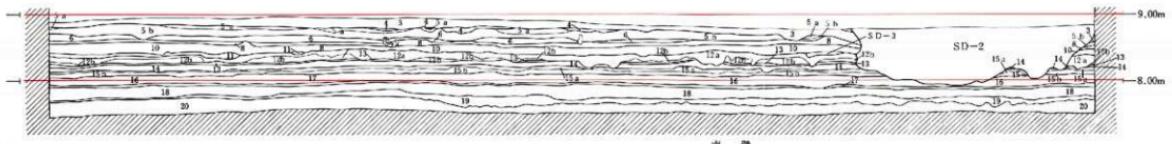
水田が予想された19層まで全面調査を行ない、以下の層は、深掘り試掘区を設定し、31層まで掘り下げ、調査を行なった。屋外調査は昭和62年10月31日に終了した。

III. 基本層位

基本層位は盛土1層から31層まで確認された。しかし、基盤となる砂礫層までは確認していない。これらはさらに35層に分けられる。1層は区间整理時の盛土である。2、3層は盛土以前の水田作土である。4層は後世の耕作によって削平されているものと思われ、部分的にしかみられない。3層下に直接5層が確認される部分がみられる。5層中には灰白色火山灰が泥に混入している。また、8層上面にまとまって灰白色火山灰が検出されている。6層、7層は調査区東側にのみ確認され、ほとんどの場所では5層下に直接8層が確認される。9層は調査区東側を中心として分布する。11層以下は泥炭層になり、未分解の植物遺体を多量に含む層（未分解植物層）と粘土層が互層になっている。調査区南側では、10層が厚く堆積しており、11層が確認できない。また、12層が凹み状に厚く堆積しており、12層下で15層が確認される部分もある。15層以下は各層が調査区全面に確認される。泥炭層中で水田土塊は比較的分解が進んでおり、未分解植物層とは区別される。また、調査区南側では16層以下が凹地状を呈する部分がある。これは、深掘りの結果確認された最下層の31層においても同様の凹み状を呈しており、調査区南側部分に何らかの凹地が存在し、その凹地は16層の堆積後に凹んだものか、あるいは堆積以前に凹んだものが16層が堆積した段階で埋まりきったものであると推測される。



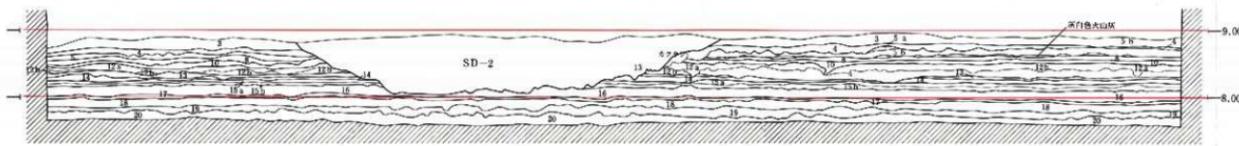
東壁



南壁



西壁



第2図 調査区土層断面図

北壁

第1表 富沢遺跡(第33次調査)基本層位、土層記表

番号	土色	土性	特徴
1	褐色	粘土質シルト	細粒粘土質。
2	褐色3Y5N	シルト質粘土	細粒粘土質。
3	褐色6Y3N	シルト質粘土	細粒粘土質。
4	黒褐色7V8R	粘土質シルト	細粒粘土質。
5 a	褐色GY8R	シルト質粘土	細粒粘土質。
5 b	褐色GY4R	シルト質粘土	細粒粘土質。
6	褐色3Y5N	シルト質粘土	下部にシルト層を含む。河原の凹凸を含む。
7	褐色3Y5N	シルト質粘土	河原の凹凸を含む。
8	褐色3Y5N	粘土	河原の凹凸を含む。細粒粘土質。
9	褐色3Y5N	粘土質シルト	多量の植物灰。松+2.5Y5Nを含む。
10	褐色3Y5N	粘土質シルト	松+2.5Y5Nを含む。発達した植物灰。
11	オリーブグリーン	シルト質粘土	部分的に機械された崩壊層。炭化植物連絡。
12 a	褐色3Y5N	シルト質粘土	炭化植物。緑色3.5Y5Nを含む。
12 b	褐色3Y5N	粘土質シルト	炭化植物。
13	褐色GY8R	粘土	炭化植物を含む。部分的に松+2.5Y5N。粘土質シルトのYRNを含む。
14	褐色YR1.7G	粘土	表面。
15 a	褐色	シルト質粘土	炭化植物を含む。
15 b	褐色3Y5N	シルト質粘土	炭化植物を含む。
16	褐色3Y5N	粘土	炭化植物。
17	オリーブグリーン	粘土	炭化植物。
18	褐色YR1.7G	粘土質シルト	表面。
19	褐色GY1.7G	粘土	多量の植物灰を含む。シルト質粘土2.5Y5Nをもつてている部分。
20	褐色GY1.7G	粘土	炭化植物。
21	褐色GY1.7G	粘土	炭化植物。
22	黒褐色YRN	粘土	炭化植物。
23	黒褐色YRN	粘土	緑色オリーブグリーンを含む。
24	褐色GY1.7G	粘土	瓦礫。
25	褐色GY1.7G	粘土	炭化植物。
26	褐色3Y5N	粘土	炭化植物。
27	オリーブグリーン	粘土	炭化オリーブグリーンをプロット。盛り土状に含む。
28	褐色GY1.7G	シルト質粘土	炭化オリーブグリーンを含む。
29	褐色3Y5N	粘土	
30	褐色GY1.7G	粘土	

+ 8.00m



深掘区土層断面図

IV. 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、2層上面で溝跡、5層、8層、10層上面で水田跡、12層上面で溝跡、15a層及び15b層、17層、19層上面で水田跡が検出されている。

遺物は軽便用平箱（テンバコ32）にして3箱程度の出土量である。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、木製品、金銀製品などがある。

なお、調査中SD-1、SD-2とした溝跡は、盛土以前まで機能していた1本の水路であることが確認された。しかし出土遺物より19世紀以前まで遡ることが指摘されたため取り上げることとした。

(1) 2層検出遺構と出土遺物

2層上面では溝跡1条が検出されている。

SD-2溝跡

本遺構は調査区西寄りに位置し、調査区を斜めに横切るようほぼ直線的に延びている。調査区内での方向はN-14°-Eである。上面幅で2.7m~5.4mである。北側が広くなっている。壁から底面については、壁中位に段を形成する部分、底面が凹み状に広がる部分、底面が分岐する部分などがみられ一定しない。底面幅は、分岐している部分などがあり一定しないが1m前後である。断面形についても各部分で変化がみられ、一定ではないが、基本的には舟底状である。

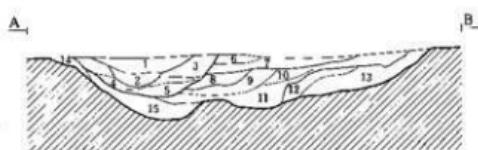
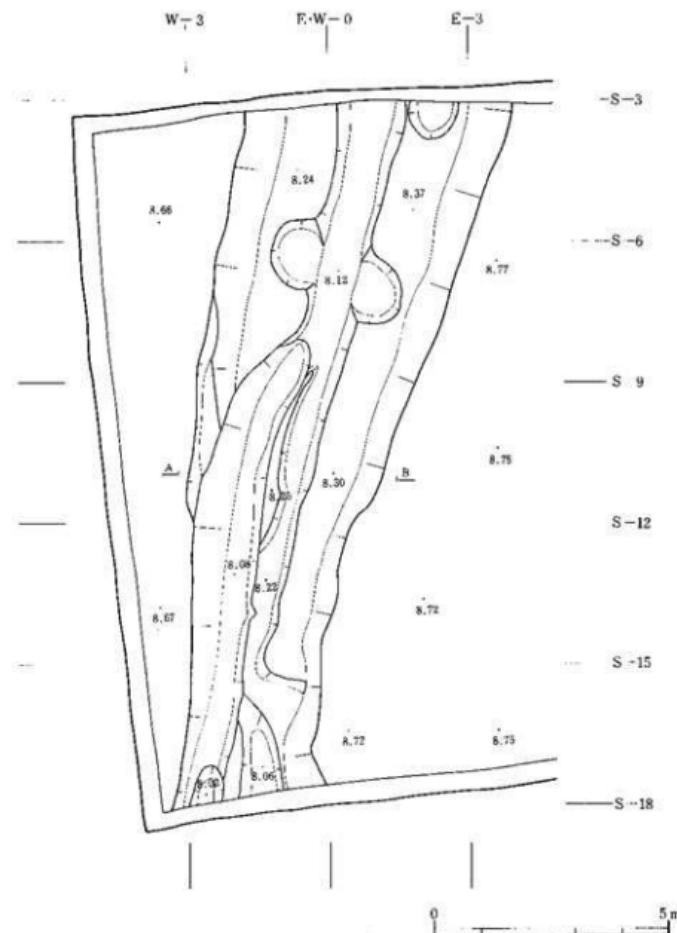
深さは、確認面から中段まで30cm~50cm、底面までは60cm~80cmである。底面レベルは相対的に南側に傾斜している。堆積土は7層に大別される。1層は黒色の粘土層、2層は黒色の砂質土層、3層は灰~黒色の

粘土~シルト層、4層は黄色~褐色砂層、5、7層は灰~黒色粘土層、6層は黒色シルト層である。各層は自然堆積層である。

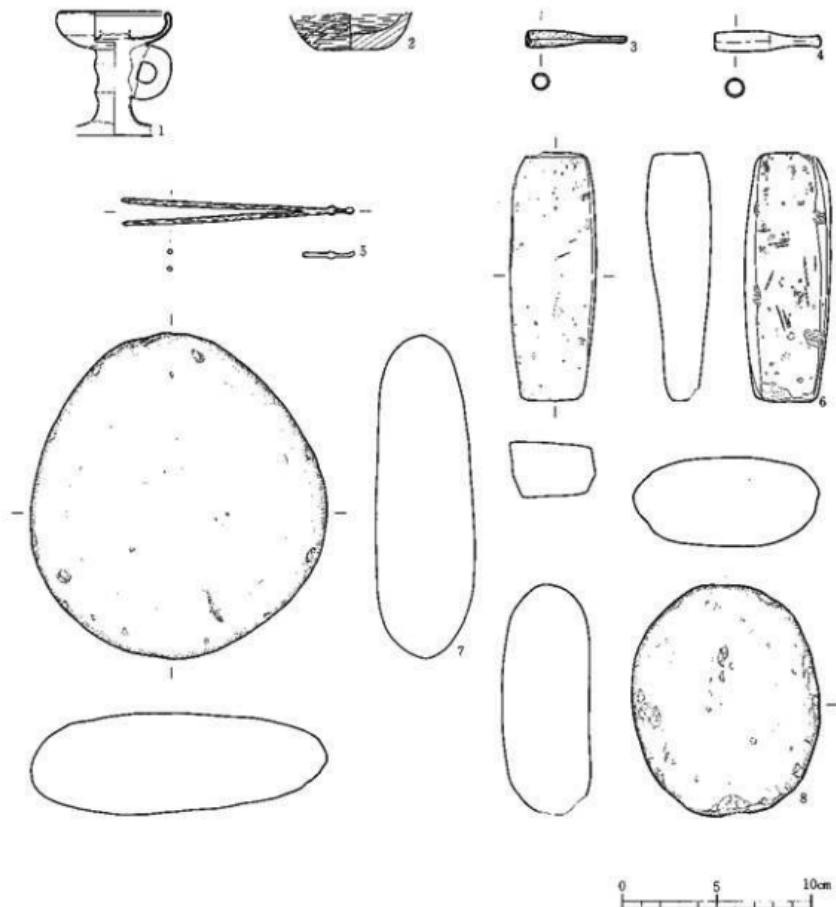
本遺構については、堆積土上部の1、2層（層No.1~5）部分が盛土される以前の水路として機能しており、かなり蛇行しながら南

第2表 SD-2堆積土記録表

層番	層名	測定場所	上色	土性	特徴
1	SD-1.2層	基盤 2.5M	粘土		變態堆積物を含む。
2	2層	モリーフ集 5.5M			
3	3層	新 5.5M	砂質粘土	偏重色を含む。	
4	4層	モリーフ集 5.5M	砂質シルト	颗粒状物質を含む。小砾のみを含む。	
5	5層	高塚 2.5M	モリーフ集	底面の炭化物を含む。小砾のみを含む。	
6	SD-2.2層	灰 5.5M	粘土		底面の炭化物を含む偏重色を含む。
7	2層	モリーフ集 5.5M	白砂質シルト		
8	3層	莫頭 2.5M	シルト		底面の砂を多量に含む。
9	4層	モリーフ集 5.5M	粘土		多量の炭化物を偏重的に含む。
10	5層	灰 5.5M	粘土		底面の砂を含む。
11		高塚 2.5M	粘土		粘土層と2.5Mを隔てて含む。小砾を含む。
12		モリーフ集 5.5M	シルト		モリーフ集 2.5Mと高塚 2.5Mを隔てて含む。
13		モリーフ集 5.5M	シルト		モリーフ集 2.5Mと高塚 2.5Mを隔てて含む。
14		モリーフ集 5.5M	粘土		モリーフ集 2.5Mと高塚 2.5Mを隔てて含む。底面を含む。
15		高塚 2.5M	粘土		底面の炭化物を含み偏重色を2.5Mと高塚 2.5Mを隔てて含む。



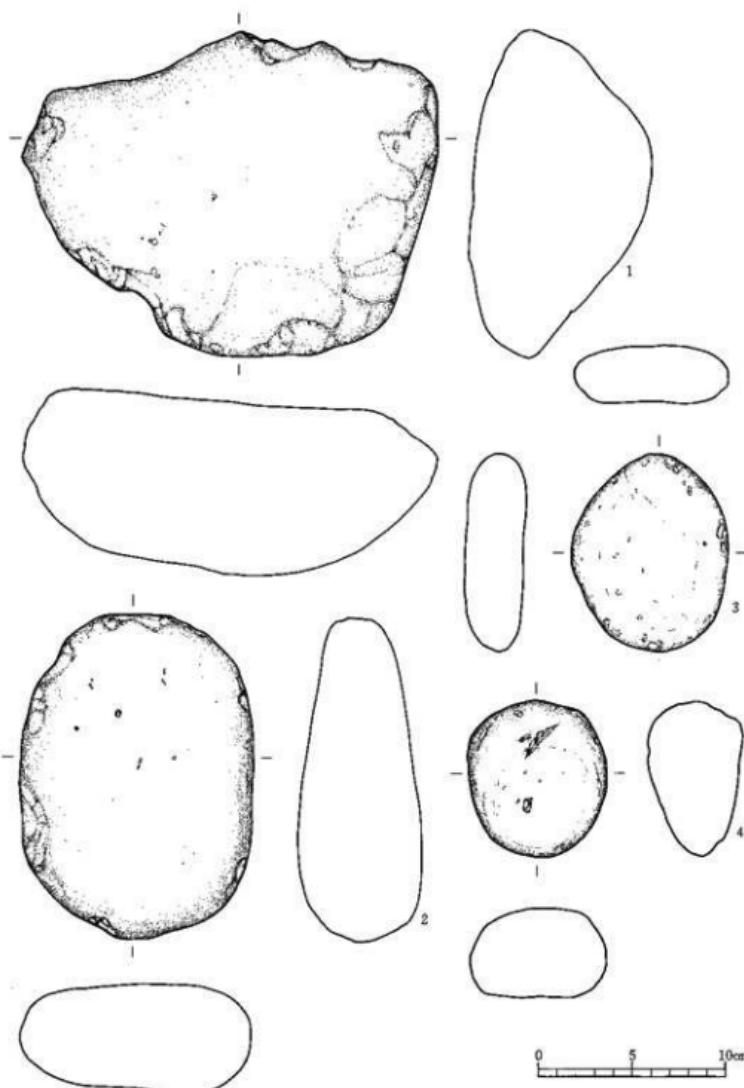
第3図 SD-2溝跡



No.	種別	直幅・厚さ	外 面	裏 面	内 面	圖号
1	投焼 素足	SD-2, 2層	ロクロナデ・鉄輪	回転糸切り	ロクロナデ・鉄輪	把手欠損
2	木製物	SD-2, 5層	回転削り	回転削り	回転削り	

No.	種別	直幅・厚さ	長×幅×厚(cm)	圖号
3	煙管・吸口	SD-2, 3層	5.3×0.9×0.05	銅製
4	煙管・吸口	SD-2, 2層	5.6×1.0×0.1	銅製
5	舟	SD-2, 5層	12.3×0.5×0.5	頭部折損
6	石 器	SD-2, 2層	13.2×4.5×3.5	
7	陶 石 器	SD-2, 3層	17.2×15.7×5.2	底一片面
8	陶 石 器	SD-2, 5層	12.2×10.0×4.8	底・片面

第4図 SD-2出土遺物(1)



No.	種別	造構・層位	長×幅×厚(cm)	使用面
1	磨石器	SD-2、5層	22.1×17.3×9.3	磨一片面
2	磨石器	SD-2、3層	17.3×12.3×5.5	磨一片面
3	磨石器	SD-2、5層	10.6×8.3×3.1	磨一片面
4	磨石器	SD-2、4層	8.3×7.3×4.7	磨一片面

第5図 SD-2出土遺物(2)

流していたものであることから、上端幅内全面が江戸時代頃からの本来の水路幅であり、その幅員内を蛇行するというものだったと考えられる。

遺物の出土状況、堆積上の状況についても砂層、粘土層のあり方から流路が一定でなかったことを示すものであると考えられる。

遺物は各層から出土している。陶磁器、木製品、石製品、金屬製品、瓦類、ガラス製品等がある。出土状況については累計表に示す。遺物の種類や出土層位によつてはみられず、規則性は認められない。

〔出土遺物〕

図示遺物は、陶器、木製品、金属製品がある。第4図1は、堤焼の乗橋である。把手及び脚端部を欠いている。内外面ともに鉄袖が施されている。2は木製の桿である。口縁部を欠いている。内、外面ともロクロによって形成されている。3・4は煙管の吸い口であり、3は銅製、4は真鍮製である。3には羅字の一部が残存していた。5は簪である。頭部は耳搔きになっている。6は砥石である。短骨形でやや中央部が膨らんでいる。両側面に陵を持ち、断面形は六角形を呈している。砥面には、皿状に凹んだ面もみられる。擦痕が観察される部分もみられる。7・8、第5図1～4は礎石器である。偏平なもの、厚みのあるものがある。それぞれ片面に磨面が観察される。その他に多数の陶磁器がある。第5図1の乗橋を除いて、他は全て破片資料である。產地が判明するものには、肥前、唐津、瀬戸、和馬、堤などがある。時代的には、中世（14世紀以降）から明治以後の近代、現代のものまで認められる。この内、幕末から明治にかけてのものが多い。

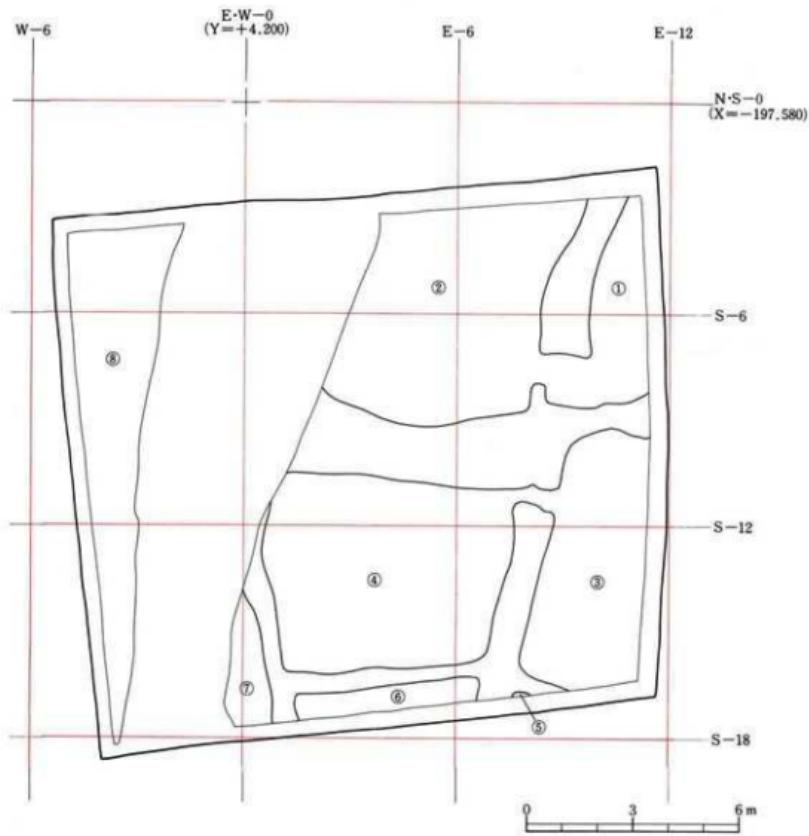
（2）5層検出水田跡

4層下面で検出された部分もあるが、4層は部分的にしか存在せず大部分は3層下面で検出された。4層以上の耕作によると思われる削平により畦の盛り上がりは検出できなかった。

しかし、作土中に斑に混在していた灰白色火山灰が帯状に途切れる部分が検出され、畦の痕跡であると判断された。

〔水田面の状況〕 確認された水田面の枚数は前述の確認状況であり、SD-2により分断されているため不正確ではあるが、①～⑧の8枚である。SD-2の東側はほぼ東西一南北方向に延びる畦畔により区画される水田が7枚検出され④のみ一区画の規模が推定でき、およそ34m²前後と考えられる。⑦についてはSD-2の西側まで広がっているものと考えられ、⑧は区画があったものと考えられるが、SD-2の西側では畦畔の痕跡は確認されなかった。

〔畦畔の状況〕 畦畔の痕跡として確認されたため、方向と確認された時点での幅について述べる。南北方向のもの3条、東西方向のもの2条が確認されている。それらの方向につい



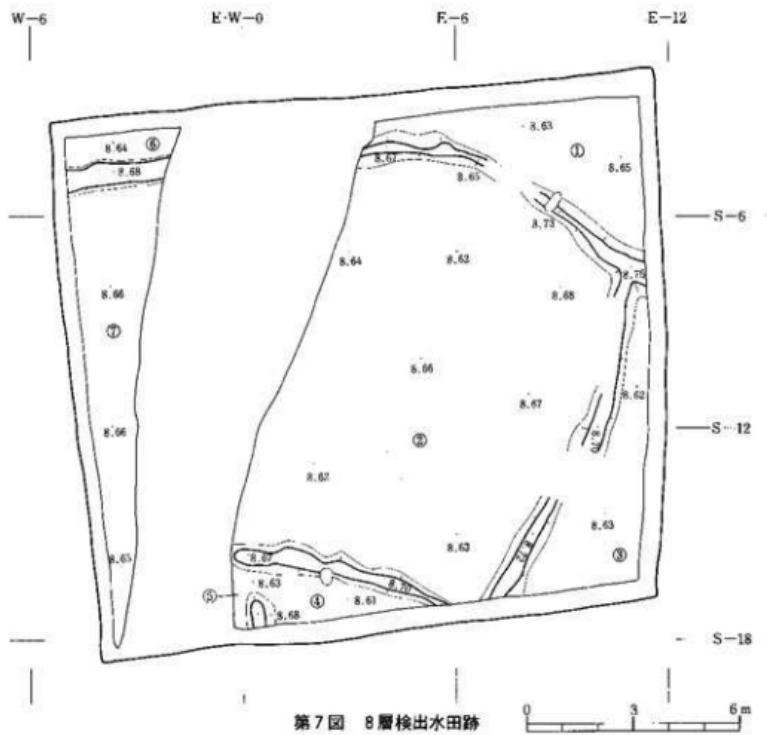
第6図 5層上面確認水田跡

てみると、S-9ライン上を東西に延びる畦畔はほぼ真東西方向を指し、これに直交するE-7～E-10ライン上を南北に延びる畦畔は西に、E-1～E-0ラインを南北に延びる畦畔は東にそれぞれ約10°傾いている。また、④と⑥の間の畦畔は北に約40°傾いている。

畦畔の幅についてはS-9ラインの畦畔が約70～200cmあり、東側が細くなっている。E-7～E-10ラインの畦畔は85～150cmである。他の畦畔の幅は35～50cmと細くなっている。

また、畦畔が途切れる部分が2ヶ所あるが、水口であった可能性もある。

〔遺物出土状況〕 5層からの遺物の出土は少なく、羽口の小破片が1点と土師器の細片が数点あるだけであり、図示遺物はない。



(3) 8層検出水田跡

〔水田面の状況〕 当水田面には、作土上面及び畦畔上に灰白色火山灰が斑状あるいはブロック状にかたまった状態で確認されている。確認された水田面の枚数は①～⑦の7枚である。畦畔は作土と同じ上によって作られており、畦畔と作土とを明確に区別することはできなかった。一区画の規模は不明であるが、②は、北、東、南の畦畔が確認され西側の畦畔はSD-2によって削平されていると考えられ、一枚の規模は80～100m²前後であると推定される。⑤についてはSD-2の西側まで広がっていると考えられ、⑦にはさらに区画があったものと考えられるが畦畔については不明である。

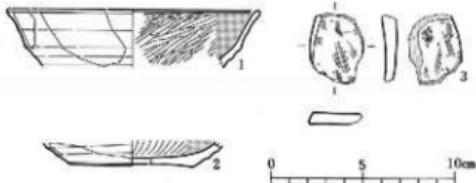
〔畦畔の状況〕 畦畔はSD-2の東側で南北方向のもの2条、東西方向のもの2条、SD-2の西側で東西方向のもの1条が検出されている。それぞれの方向は、E-6～E-10に延びるものは東に約20°傾いている。東西方向のものは、S-17～S-16に延びるものは北に約

15°傾き、S-8-S-4に延びるものは北に約30°傾いているが緩やかに南側へ弯曲している。SD-2の西側のものは南へ約10°傾いている。畦畔の規模は、SD-2の東側では上端幅で15~40cm、下端幅で70~100cmであるのに対し、西側のものでは上端幅で55~70cm、下端幅では70~90cmである。畦畔の高さは第7図から明らかのように数cm程度であり、後世の耕作のためのものと思われるが、作土上面で盛り上がりが所々途切れている部分がある。

また水田面④と⑤の間の畦畔とS-17~S-16に延びる畦畔の間が途切れているが他の畦畔が途切れている部分と状況が異なっており、水口であると考えられる。

〔遺物出土状況〕 作土上面及び作土中より今回の調査区内では比較的多くの遺物が出土している。土師器片、須恵器片、石製品があり、土師器の小片が多い。

〔出土遺物〕 図示したものは、土師器片2点と砥石の破片1点のみである。1は体部上半部、2は底部である。いずれも製作に際してロクロを使用している。2の底部の切り離しは



No.	種別	所位	外 面	底 部	内 面
1	土師器片	8層	ロクロナデ		ミガキ・黒色処理
2	土師器片	8層	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色処理

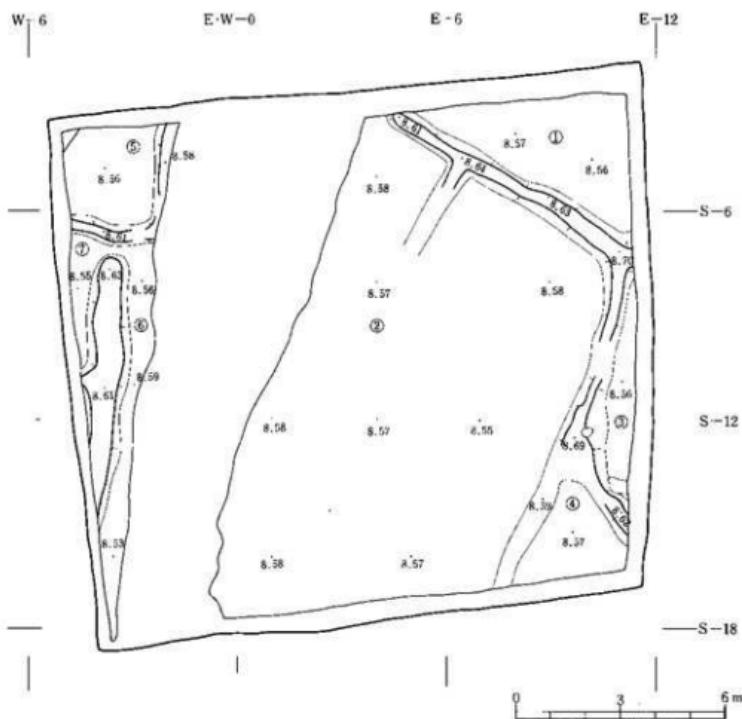
第8図 8層水田跡出土遺物

回転糸切りで、再調整はみられない。器面調整は、外面はロクロ調整のみであり、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、体部上半部で斜方向、底面では放射状である。3は砥石である。底面は皿状に凹んでおり、擦痕もみられる。

(4) 10層検出水田跡

〔水田面の状況〕 10層で確認された水田面は①~⑦の7枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。一区画の規模が判明する水田は一面もない。水田②については、北側の畦畔から南西方向に畦が延びていた痕跡が認められ、さらに小さな区画がなされていたものと考えられる。作土上面における傾斜はほとんどみられない。

〔畦畔の状況〕 畦畔はSD-2の東側で東西方向のもの1条、南北方向のもの1条、SD-2の西側で東西方向のもの1条、南北方向のもの2条が検出されている。それぞれの方向は、SD-2東側においては、東西方向のもののうち北側のものはW-約30°-Nである。南北方向のものは、N-約25°-Eであり、E-9°、S-13付近で2方向に分れ東側へ延びるものはおよそS-30°-Eの方向で延びている。また水田面②を区画していたと思われる畦についてN-



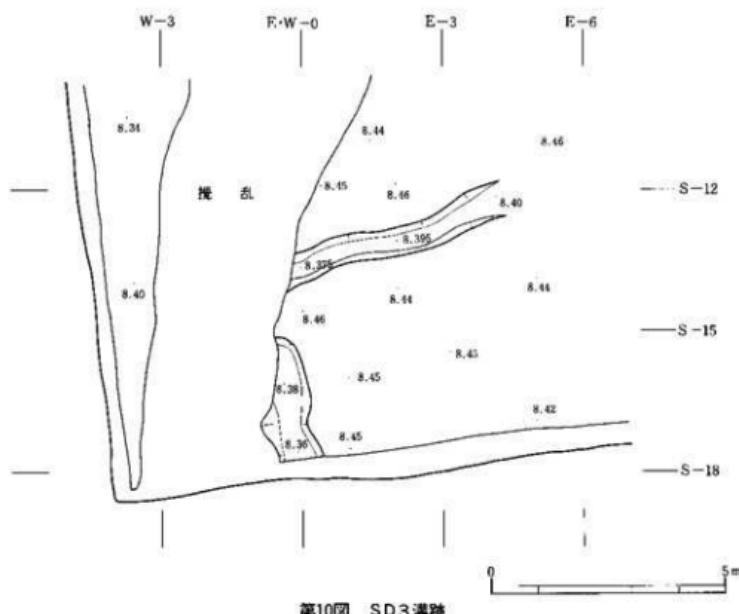
第9図 10層検出水田跡

約30°—Eである。SD—2の西側では、南北方向の2条のものはいずれもN—約5°—Eである。東西方向のものは弯曲しているがほぼ真東西方向に延びている。畦畔の規模は、SD—2の西側の水田⑥と⑦の間の畦畔のみが、上端幅60~80cm、下端幅120cm前後であるのに対して、他の畦畔は上端幅25~50cm、下端幅50~90cm程度である。畦畔の高さは数cm~10cm程度である。特に調査区南東部分では、畦畔の盛り上がりが観察できない部分もある。また、水田面⑥と⑦の間の畦畔と水田面⑤の南側の畦畔は交差せず水口であると思われる。

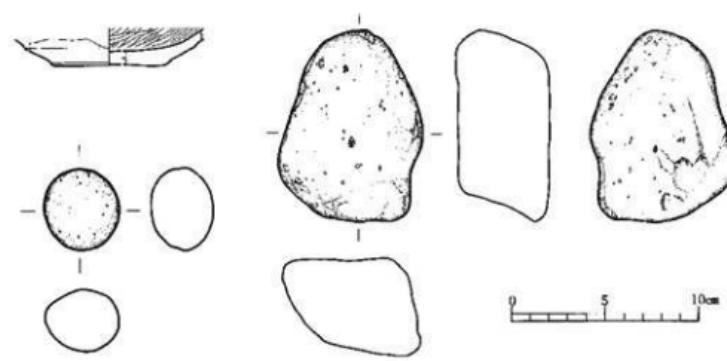
〔遺物出土状況〕 作土中より、土師器小片が數点出土しているだけであり、図示遺物はない。

(5) 12層検出遺構

SD—3溝跡 12a層上面のS—12・E—4付近からS—18・E、W—0にかけて検出さ



第10図 SD3溝跡



No.	種別	部位	外観	底部	内面
2	碌石器	12枚	4.3×4.0×3.3	磨一全面	
3	碌石器	12枚	10.2×7.7×4.9	磨一全面	

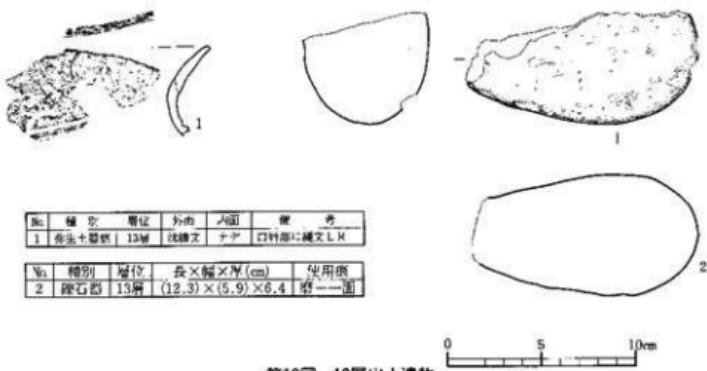
第11図 12層出土遺物

れたが、削平のためか、遺構の一部が残存するのみであり、全体を把握することはできなかった。また、SD-2に切られており、本来同一の「L」字形の溝であるのか、2条の溝であるのかは、堆積土が同一で判別することはできなかった。方向は北側部分は、W-18°-S、南側部分は、N-15°-Wである。堆積土は、7.5YR灰粘土質シルトの単層である。水田に取り付く水路であるかどうかについては、12層で水田の痕跡が検出されておらず不明である。溝に伴う出土遺物はないが、12層上面で数点の土師器の小破片、石器が出土している。

〔出土遺物〕 図示したものは、土師器壺1点と礫石器が2点である。1は底部で、製作に際してロクロを使用している。底部の切り離しは回転糸切りである。再調整はみられない。器面調整は、外表面はロクロ調整のみであり、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。2・3は礫石器である。いずれも全面に磨痕が認められる。

(6) 13層

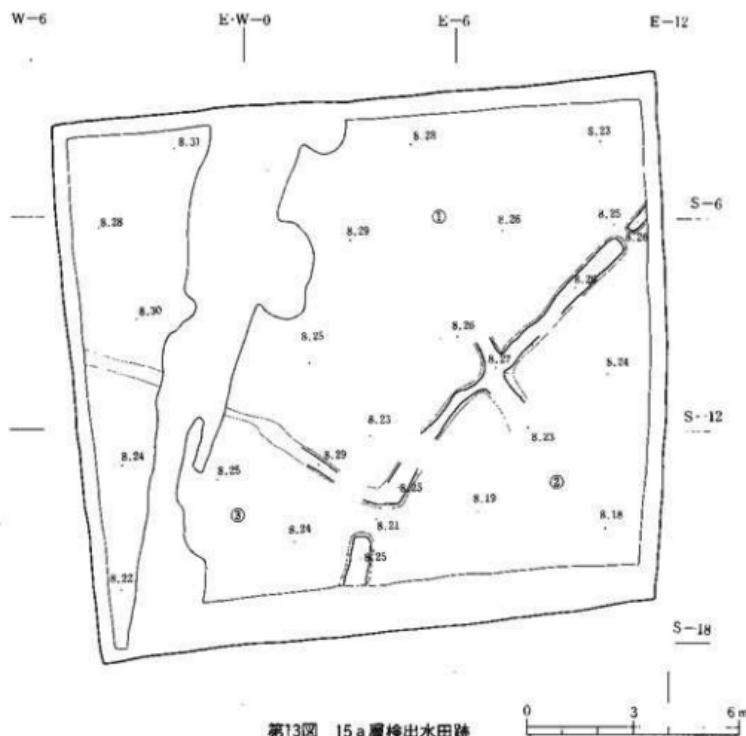
13層では、上面・層中において遺構は検出されなかつたが、層中より弥生土器片と礫石器が出土している。弥生土器は同一個体であると思われる。小破片であり、全体の器形は不明であるが、頭部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反しながら立ちあがる。頭部に2条、横位の沈線文が施され、口縁部にL R繩文が施文されている。口縁部内・外表面ともナデ調整されている。礫石器は破損品である。



第12図 13層出土遺物

(7) 15a層検出水田跡

〔水田面の状況〕 15a層上面では3条の畦畔が検出され、水田面は大きく①～③の3枚しか把えられない。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別するこ



第13図 15-a 施排水水田跡

とはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、東側の畦畔に、他の畦畔が交差していたと思われる部分があり、水田区画が存在していたことは推測できる。作土上面においては南東方向への緩やかな傾斜がみられ、特に②の水田面においては顕著である。

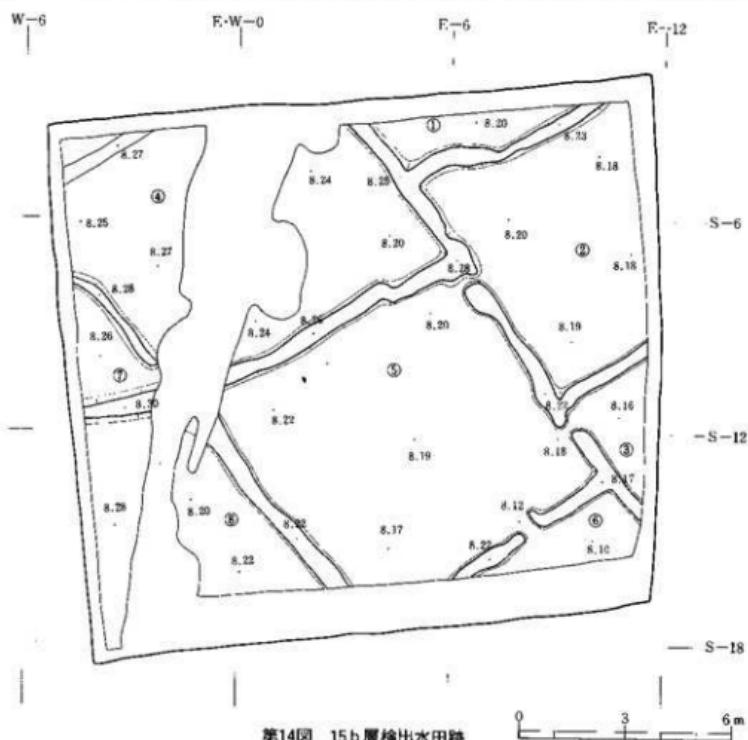
〔畦畔の状況〕 東側の畦畔はE-45°-Nの方向を指して東側へ延びている。E-7-S-10付近で南北方向に畦畔が延びていた痕跡が認められ、N-約30°-W方向で延びていたものと思われる。E-4-S-14付近で屈曲し、W-約25°-Nの方向を指して緩やかに寄曲しながら西側に延びている。E-2ラインより西側では畦畔の盛り上がりは観察できなかった。南側の畦畔はN-10°-Eの方向を指し、南側へ延びている。畦畔の規模は上端幅20~50cm、下端幅で35~70cmと一定していない。高さは、数cm程度である。①と②の間の畦畔の東端付近及び、②と③の間の畦畔の北側が途切れている。他の畦畔が途切れている部分とは異なっており、水口

であると思われる。

〔遺物出土状況〕 調査区北東部の作土中より、弥生土器片が集中している。これは後述する15b層水田跡出土土器と同類の破片と考えられ、15a層耕作の際に15b層中の遺物を混入させたものと考えられる。また、同じく作土中より石器が1点出土している。

(8) 15b層検出水田跡

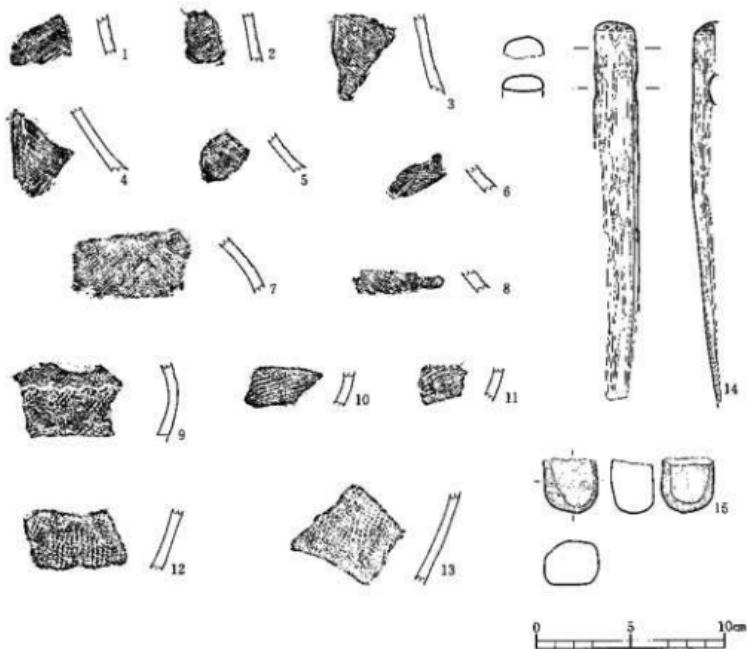
〔水田面の状況〕 確認された水田面の枚数は①～⑧の8枚である。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。調査区内において一区画が完全に検出されたものはないが、一部のみが調査区外へ広がっているものがあり、ほぼ正確に水田区画を把握することができる。その規模は東西約8m、南北7～8mの方形で、面積は56～64m²程度である。作土上面の傾斜は、水田面⑤・⑥・⑧において南東方向へ緩やかに傾斜している。その比高差は⑤の水田面でおよそ10cmである。その他の面では、傾斜はみられ



第14図 15b層検出水田跡

す、ほぼ平出である。

〔畦畔の状況〕 畦畔は南北方向のもの2条、東西方向のもの4条が検出されている。それぞれの方向は、南北方向の2条は、N-52°~55°-Wの方向を指し、東西方向の4条の畦畔は、E-28°~32.5°-Nの方向を指し、南北方向及び東西方向の畔は、ほぼ直角に交差しており、それぞれの畦畔には規則性がみられる。また、水田面①と②、④と⑤、④と⑦の間の畦畔には、屈曲や弯曲がみられる。畦畔の規模は、上端がおよそ30~50cm、下端幅は50~60cmと、ほぼ一定である。高さは数cm程度である。水田面②と③、③と⑤、④と⑦の間の畦畔には、畦畔の交差する部分が途切れしており、それぞれ水口であると思われる。また、水田面⑤と⑥の間の畦畔では、畦畔の中央部寄りに水口と考えられる部分があり、畦畔が水口の部分で屈曲している。



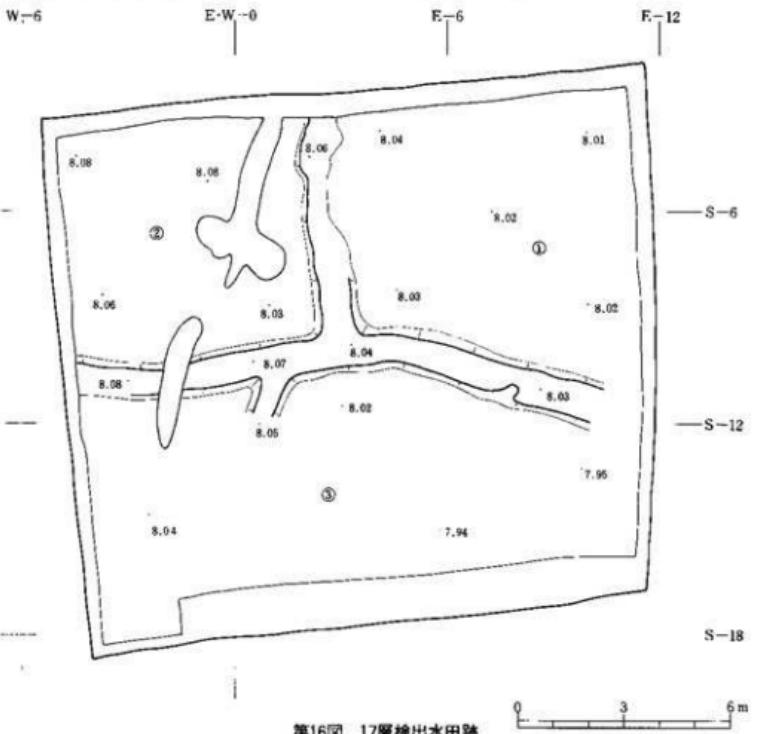
No.	種別	単位	外観	内面	箇名
1-13	木生上部	生?	15a 畦畔	断面-平行四辺形(4-6cm)、直角-直角(1.4-1.6cm)	L.R.木製(14)

No.	種別	単位	長×幅×厚(cm)	箇名
14	不明木製品	15b 畦?	(20.1)×2.3×(1.3)	普通穴有り、ヒノキ属の一種
15	不明石斧?	15a 畦?	(2.9)×2.8×2.3	

第15図 15層水田跡出土遺物

〔遺物出土状況〕 調査区北東部の水田面①と②の間の畦畔部分を中心として、作土中及び畦畔上から弥生土器片が出上している。また、水田面③の作土上面より石器片と、水田面⑧の作土中より木製品が出上している。

〔出土遺物〕 1~13は弥生土器片である。文様、胎土等から同一個体と思われる。頸部から体部までの破片である。全体の器形は不明であるが、各々の破片を総合すると体部は膨らみを持ち、肩部から頸部にかけて窄まり、頸部はやや内傾しながら立ち上がっている。頸部から体部上半にかけて、半截竹管状の工具による同時施文の平行沈線文が施されている。二本一描のもので、山形文、直線文等がみられる。体部の最も膨らむ部分には、上端に綾絞文をめぐらした横位LR繩文が施され、体部下半には、LR繩文が施文されている。14は性格不明の棒状木製品である。樹種は「ヒノキ属の一種」である。上部に穿孔がみられる。15は、かなり摩滅しているが、磨製石斧の基部の可能性がある。また、図示してはいないが、擦痕のある粘板岩の小片があり、「石包丁」の一部である可能性がある（写真25-2）。



第16図 17層検出水田跡

(9) 17層検出水田跡

〔水田面の状況〕 17層上面では、2条の畦畔が検出されており、水田面は①～③と大きく3枚しか把えられない。畦畔は作土と同じ土によって作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、東西方向の畦畔には、南側へ畦畔が取り付く部分がみられ、③の水田面には、さらに区画が存在していたものと思われる。作土上面の傾斜は、水田面①、②においてはほとんどみられないが、水田面③においては、南東側へ緩やかに傾斜している。その比高差は約8cmである。

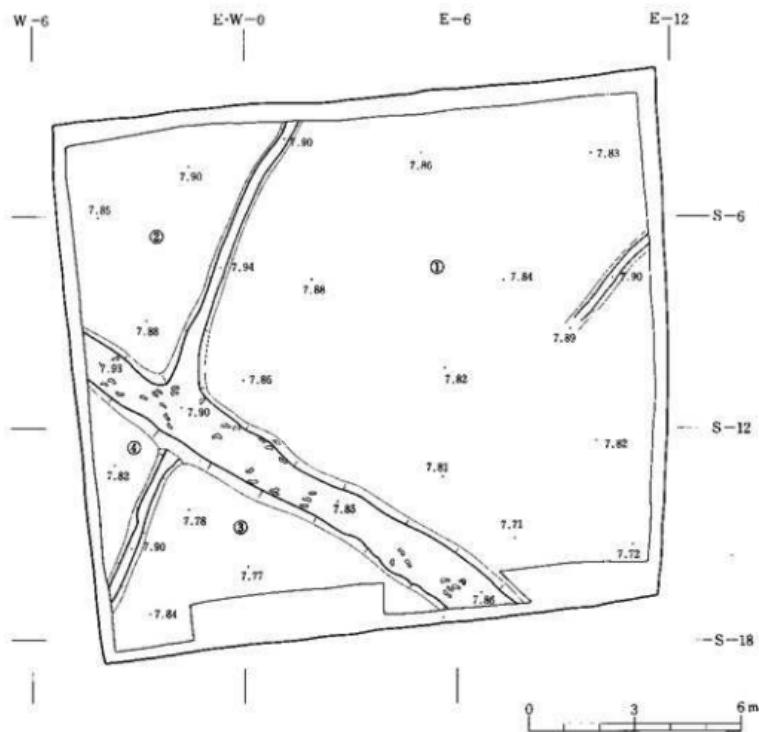
〔畦畔の状況〕 畦畔は、東西方向のもの1条と南北方向のもの1条が検出されている。東西方向のものは、ほぼ真東西方向であるが、大きく南側へ弯曲している。これに直交する南北方向のものは、真北よりやや西(N-5°-W)に傾いている。東西方向の畦畔から南へ延びると思われる畦畔は、N-約20°-Eの方向であると思われる。畦畔の規模は、東西方向のものは上端幅で80cm前後、下端幅で110～120cmである。南北方向のものは、上端幅で80cmであり、下端で120cmであるが、大部分盛り上がりが削平されている。

〔遺物の出土状況〕 17層上面、及び作土中からは遺物は出土しなかった。

(10) 19層検出水田跡

〔水田面の状況〕 確認された水田面は、①～④の4枚である。畦畔は作土と同じ土によつて作られており、畦畔と作土を明確に区別することはできなかった。水田面の区画については、その枚数、規模ともに不明である。しかし、水田面①では、畦畔が1条確認されており、さらに区画が存在していたものと考えられる。作土上面の傾斜は、水田面②、③、④においてはほとんどみられないが、水田面①においては、南東方向に緩やかに傾斜している。その比高差は最大18cmである。水田面①の東側で、途切れている畦畔の延長ラインで傾斜が変わり、より東側で傾斜が大きくなっている。この部分で、水田面①が区画されていたことが考えられる。また、水田面①、②と③、④の間の畦畔をはさんで南側と北側では水田面のレベルが違っており、南側が一段低い水田面となっている。

〔畦畔の状況〕 畦畔は、東西方向のもの1条と南北方向のもの3条が検出されている。南北方向のものについては、水田面①と②の間のものと、③と④の間のものについては、水田面のレベルが南側が一段低くなってしまい、同一の畦畔ではなく、別の畦畔であると判断した。それぞれの方向は、東西方向のものはW-約30°-Nの方向を指し、南北方向のものは水田面①の東側の畦畔がN-39°-Eの他、西側のものはN-23°-Eと、東側のものがやや東偏している。畦畔の規模は、東西方向のものは上端幅で100～140cm、下端幅で145～200cmで南北方向のもの



第17図 19層検出水田跡

が、上端幅24~50cm、下端幅で42~75cmと、東西方向の畦畔の方が規模が大きくなっている。また高さについても、東西方向のものが、4~13cmあるのに対し、南北方向のものは数cm程度である。また、南北方向の畦畔上を中心として足跡が検出されている。その方向性については、畦畔の方向に沿っているものが多いようであり、大きさについては、20~25cm前後のものが多くなっている。

〔遺物出土状況〕 19層上層及び作土中からは遺物は出土しなかった。

V. 考察とまとめ

1. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、金属製品、ガラス製品、木製品、石製品が出土している。ほとんどが破片資料である。最も多いのはSD-2水

路より出土した陶磁器類である。各遺構、層位毎に個々の遺物については取り上げている。ここでは比較的図示資料、写真資料の多い陶磁器、土師器、弥生土器、石製品についてまとめてみたい。

(1) 陶磁器

209点出土した。壺1点を除いて全て破片資料である。大部分がSD-2水路から出土したものである。產地の判明するものでは、肥前、唐津、瀬戸、美濃、相馬、堤等がある。肥前のものが最も多く、相馬がこれに次ぎ、これらで全体の半数近くを占めている。時代的には中世から明治以後の近代、現代のものまでが認められるが、江戸時代後期以降、明治にかけてのものが多くなっている。

(2) 土師器

38点の破片資料が出土した。そのうち壺は27点あり、図示資料は3点である。全て成形時にロクロが使用され、内面にヘラミガキと黒色処理がみられる。底部資料の切り離し技法は回転糸切りで、再調整は施されていない。これらの土師器は、その特徴から「表杉ノ入式」に属し、平安時代に位置付けられるものである。

(3) 弥生土器

29点の破片資料が出土している。13層及び15a・15b層から出土しているが、それぞれ、同一個体の破片であると考えられる。13層出土のものは口縁部の破片であり、全体の器形は不明であるが、口唇部に網文、頸部あるいは肩部に、2条以上の沈線文が施文されている。小破片の為、詳しい型式は不明であるが、弥生後期に属するものであると考えられる。^(註1) 15層出土のものは、半截竹管状の施文具による平行沈線文(二本一描)が施文されている。文様には、山形文、直線文などが組み合せられ、体部では沈線文の文様帶の下部に、上端に綾絡文をめぐらしたLR網文が施文されている。器形は、体部が膨らみ、肩部で窄まり、頸部は内傾しながら立ちあがる、壺あるいは壺形のものであると思われる。15層出土土器に類似する資料は、山口遺跡等で出土しており、十三塚式に比定されている。^(註2) 本資料も十三塚式に比定して差支えないものと思われる。

(4) 石製品

石製品には、砥石と礫石器等がある。砥石は2点出土している。SD-2溝跡、8層水田より出土している。SD-2溝跡出土のものは完形であるが、8層出土のものは破片である。礫石器は9点出土している。SD-2溝跡より6点、12層より2点、13層より1点出土している。全面及び一面に磨痕が観察される。大きさ、形態、使用形態については、規則性や統一性はみられなかった。その他に15a層より磨製石斧の基部と思われる石器、15b層から石包丁の破片と考えられる擦痕のある石器片も出土している。

2. 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、溝跡2条、水田跡7面である。このうち本項では、SD-2溝跡と水田跡について取り上げる。

(1) SD-2溝跡

SD-2溝跡は掘り込まれた年代は不明であるが、区画整理の感覚上以前まで機能していた水路である。調査区内では、上幅は2.7~5.4mであったが、水路として水が流れている部分は幅1m程度であったと思われ、前述の上幅の範囲内で流路を変えながら蛇行していたものと考えられる。

この水路を境に、字名が、東側は「宮田」、西側は「鳥居原」ということから、字境いの役割も果たしていたことが知られる。これらの地名は、どの時代まで遡ることができるか、明らかではないが、出土遺物から江戸時代後半からは機能していた可能性がある。また、堆積土中から瓦片も出土しており、それ程離れていない場所に瓦葺きの建物が存在していたことが考えられる。

(2) 水田跡

水田跡は、5層、8層、10層、15a層、15b層、17層、19層の7面で検出されている。各々の概要と富沢遺跡における位置付けを考えることにする。

5層検出水田跡 作土中の灰白色火山灰の混入の状況によって、畦畔の痕跡が確認されたのみであるが、本来、8層上面に存在した灰白色火山灰を耕作の際にまき込んだものであると考えられる。このことから、畦畔は作土と同じ土で作られているが、耕作の際には畦畔の部分をよけて作業しているものと考えられる。この水田跡の年代は出土遺物の点から明確にはできないが、直下層上面の灰白色火山灰をまき込むということから、平安時代以降のものであると考えられる。

8層検出水田跡 上面に灰白色火山灰が乗る部分があり、出土遺物からみても、平安時代に位置付けられる。水田の区画については調査区が狭いということもあり、明確にすることはできなかった。しかし、南北方向の畦畔の方向は約20°東に偏している。また、畦畔の交点に関しては、調査区内では「Y」あるいは「T」字状になる。標高はおよそ8.68~8.60mである。

10層検出水田跡 水田区画、畦畔の方向など、8層検出水田跡と共通点がいくつか認められる。特に北側の畦畔と東側の畦畔は8層のものと、ほとんど重なっている状態であり、畦畔の交点に関しても「Y」あるいは「T」字状になっている。しかし、東側の畦畔に8層にない畦畔がとり付き、南側の畦畔もみられない。また、北側の畦には南側に畦畔がとりつく痕跡があり、8層の区画より小さい区画になるものと思われる。標高は8.57~8.52mである。

15a層検出水田跡 調査区内では畦畔が3条検出されている。「Y」字状に交差しており、

交点の南側に水口が検出されている。水田区画については不明であるが、下層の15b層検出水田と極めて類似した土壤であり、大きな時間差が下層の水田との間に存在するとは考えにくい。また、本来下層中に存在したと考えられる遺物をまき込んでいるということからも、時間的な隔たりは少ないものと思われる。標高は8.30~8.17mである。

15b層検出水田跡 当水田跡は、出土した弥生土器から、弥生時代後期の十三塚式期に位置付けられる。水田の区画は、かなり規則的なもので、調査区内で8枚の水田面が検出されており、ほぼ一区画が判明するもので、南北7~8m、東西約8mの方形の区画となっている。面積は56~64m²程度である。標高は8.25~8.06mであり、特に南東方向に傾斜している。

17層検出水田跡 調査区内では2条の畦畔が検出されている。「T」字状に交差している。水田区画については不明であり、出土遺物がなく時期を特定することも困難である。標高は8.08~7.94mであり、南東部分が凹み状に下がっている。

19層検出水田跡 当水田跡は、上幅100~140cmの大畦と上幅20~50cmの小畦によって区画された水田跡と考えられる。大畦の方向はW-30°—Nと真北に対して60°西偏している。標高は約7.89~7.71mであり、南東隅付近が最も低い。

以上が検出された水田跡の概要である。

本調査区は富沢遺跡の東部に位置しており、これまでほとんど調査の行なわれていない地区である。わずかに、南西約100mの地点で、第32次調査が約90m²の面積で行なわれているのみである。第32次調査では、灰白色火山灰層が含まれる層が2層確認され、それらの直下の層で畦畔が1条検出されている。^(注3) 上部の灰白色火山灰が含まれる層は、本調査区の5層、8層に対応するものと考えられる。平安時代の水田跡が3層にわたって検出され、他の地区においても平安時代の水田面は灰白色火山灰が乗る層をはさんで3層検出されており、東部においても同様の状況であることが確認された。しかし、水田区画については不明な点が多い。奈良時代~古墳時代の水田跡については、本調査区において検出されず、東部では不明である。弥生時代の水田跡については、今回の調査で、東部においては4層の水田が検出された。15a層、15b層のものは十三塚式期の水田跡と考えられ、富沢遺跡内でも明確な水田区画が検出されたのは第15次調査時に検出されているのみであり、他の地点では対応する土層は確認されているが、水田区画は検出されていない。また、十三塚式期の水田が2層検出されたのは初めての成果であるが、第15次調査検出の水田跡との対応関係は、畦畔の方向が類似していることから、15b層水田跡が対応するものであると思われる。^(注4) 17層及び19層検出水田跡については、出土遺物がなく時期は明らかではないが、19層水田跡は畦畔の構成、土層の状況から樹形圓式期のものであると考えられ、17層水田跡は、十三塚式期以前、樹形圓式期以降の時期と考えられる。

第4表 写真図版遺物観察表

写真図版	遺構、層位	種類	器種	外 面	内 面	産地	年代
10-1	SD-2, 4層	磁器	碗	染付(梅樹文)		肥前	江戸
-2	SD-2	磁器	碗	染付	染付	肥前	18C~幕末
-3	SD-2, 3層	磁器	皿	染付	染付(唐津文)	肥前	18C前半
-4	SD-2, 3層	磁器	皿	染付	染付	肥前	18C以後
-5	SD-2, 4層	磁器	皿?	染付	染付	肥前	18C~
-6	SD-1	磁器	?	染付		肥前	18C~
-7	SD-2, 3層	磁器	皿		染付(況み乾/月輪は鉛)	肥前	18C
12-1	SD-2, 4層	磁器	皿		染付	肥前	江戸
-2	SD-2, 5層	磁器	皿	白磁?		肥前	江戸
-3	SD-2, 5層	磁器	碗	染付(耐日文)	染付(網口文)	肥前	江戸
-4	SD-2, 5層	磁器	碗	染付		肥前	18C
-5	SD-1	磁器	碗	染付		肥前	18C
-6	SD-1	磁器	小碗	染付		肥前	18C
-7	2~3層	磁器	碗	染付(丸文)	染付	肥前	18C
-8	2~3層	磁器	碗	染付		肥前	18C
14-1	SD-1, 2層	陶器	或or 瓢			唐津	18C以後~幕末
-2	SD-2, 1層	陶器	皿	灰釉	鐵鉢灰釉	唐津	18C
-3	SD-2, 1層	陶器	大鉢			唐津	18C
-4	SD-2, 1層	陶器	或?	灰釉	灰釉	唐津	18C
-5	SD-2, 1層	陶器	皿	灰釉	青釉	唐津	18C
-6	SD-2	陶器	大鉢	釉	釉	瀬戸or美濃	
-7	SD-2	陶器	大鉢or 瓢	釉	釉	瀬戸or美濃	
16-1	SD-2, 3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18C?
-2	2~3層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18C
-3	2~3層	陶器	端反皿	灰釉	灰釉	九州地方	18C~
-4	SD-2, 2層	陶器	皿	灰釉	灰釉	九州地方	18C?
-5	SD-2, 3層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18C?
-6	SD-2, 3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18C?
-7	SD-2, 5層	陶器	碗	灰釉系	灰釉系	九州地方	18C
-8	SD-1	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18C
-9	SD-2, 3層	陶器	碗	灰釉	灰釉	九州地方	18C?
18-1	SD-2, 4層	陶器	天目茶碗	鐵釉	鐵釉	瀬戸	江戸初期以前
-2	SD-2, 2層	陶器	或	灰釉、墨書き文字?		瀬戸	中世(14C以前)
-3	SD-2, 3層	陶器	盤の耳	鐵釉	鐵釉	瀬戸	中世?
-4	2~3層	陶器	或			県内產	中世
-5	SD-2, 4層	磁器	皿	白磁	白磁	東北	江戸
-6	SD-2, 4層	磁器	急須注口	染付		会津平清水	江戸
20-1	SD-2, 4層	陶器	急須			相馬	幕末?
-2	SD-2, 4層	陶器	土瓶			相馬	
-3	SD-1, 2層	陶器	七瓶			相馬	幕末~
-4	SD-2, 4層	陶器	碗	灰釉	灰釉	相馬	19C
-5	2~3層	陶器	皿or 瓢	灰釉	灰釉	相馬	幕末~明治
-6	SD-2, 5層	陶器	碗	灰釉	灰釉	相馬	幕末~明治
22-1	SD-2, 4層	陶器	鉢	なまこ鉢	なまこ鉢	提	江戸?
-2	SD-2, 4層	陶器	小甕?	鉄釉	鉄釉	提	江戸

写真1 8層検出水田
(北→南)



写真2 10層検出水田跡
(北→南)

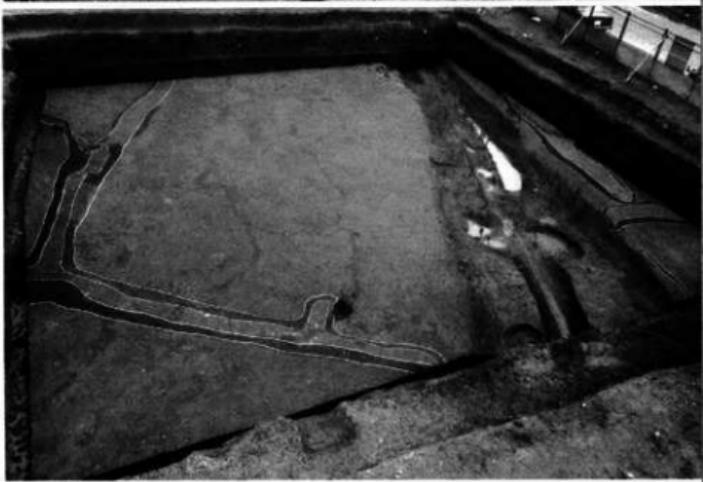


写真3 SD3溝跡
(西→東)



写真4 15a層検出水田跡
(北→南)



写真5 15b層検出水田跡
(北→南)



写真6 17層検出水田跡
(東→西)



写真7 19層検出水田路
(北西→南東)



写真8 19層検出畦畔上
の足跡
(西→東)

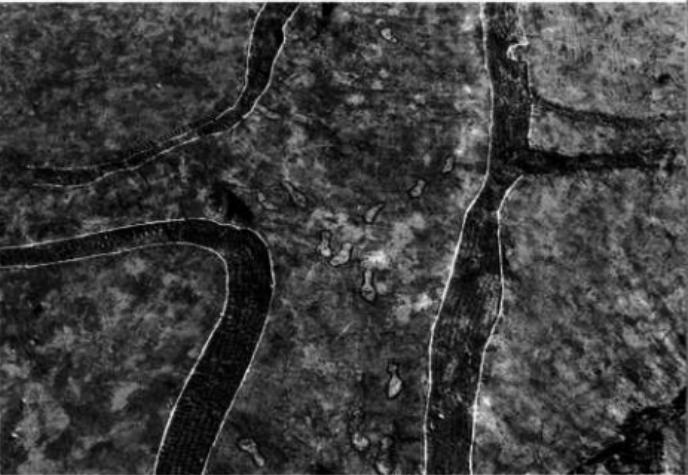


写真9 北壁土層断面
(南→北)

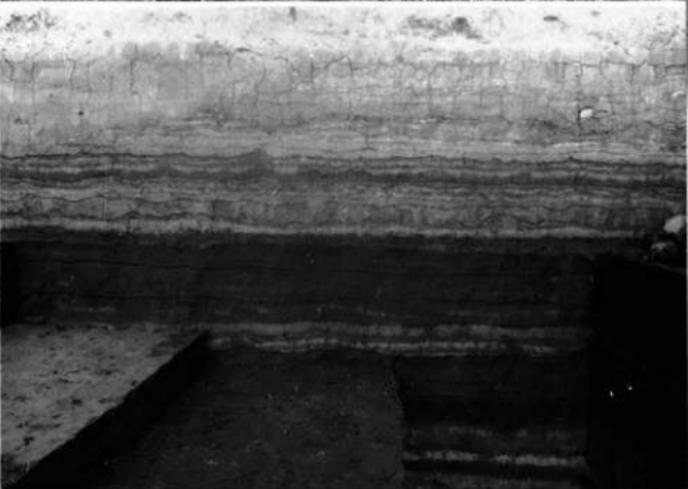


写真10 出土遺物1
肥前(外面)

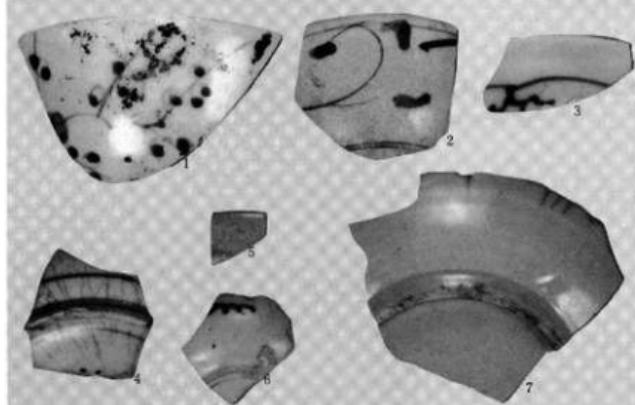


写真12 出土遺物2
肥前(外面)

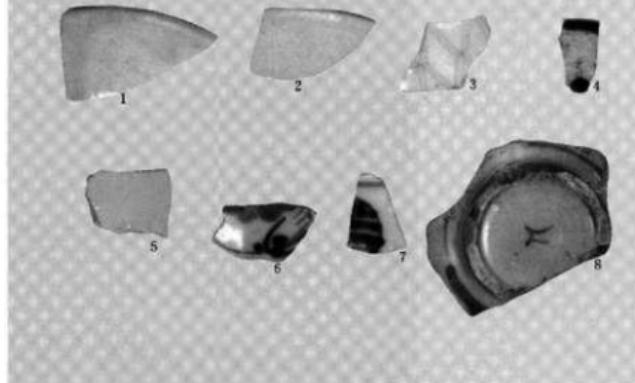
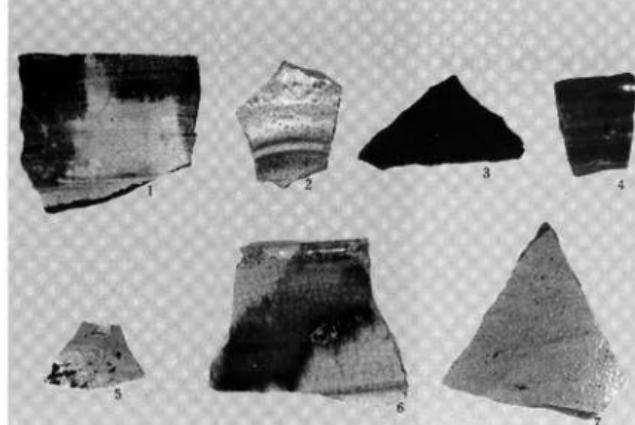


写真14 出土遺物3
唐津
瀬戸・美濃
(外面)



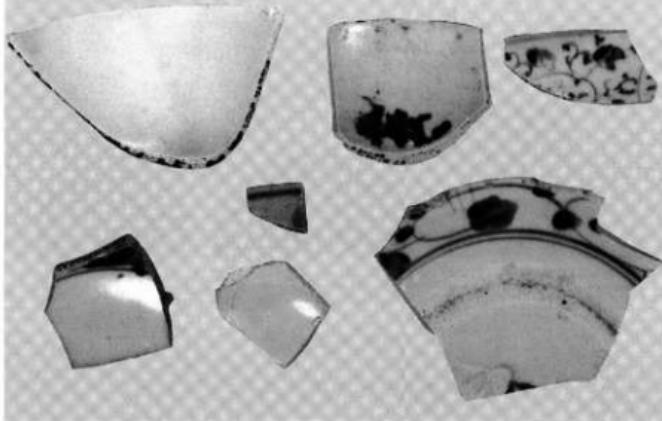


写真11 出土遺物1
肥前（内面）

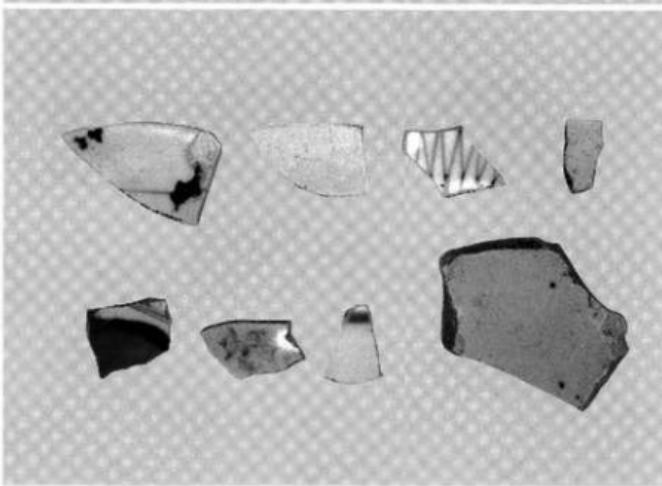


写真13 出土遺物2
肥前（内面）

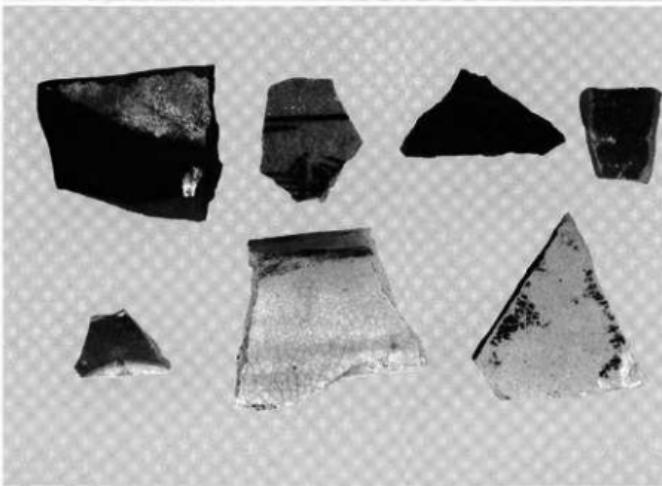


写真15 出土遺物3
唐津
瀬戸・美濃
(内面)

写真16 出土遺物4
九州産（外面）

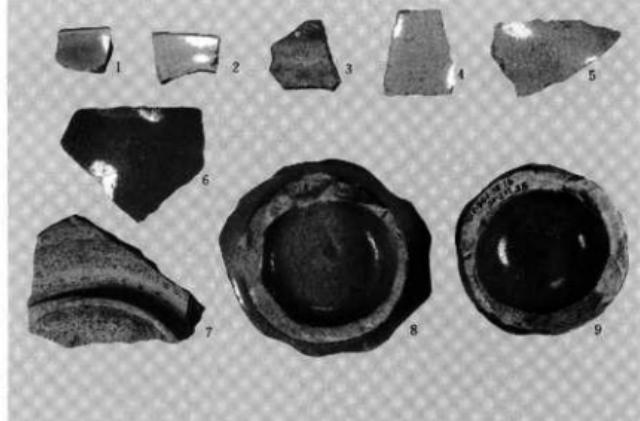


写真18 出土遺物5
瀬戸
東北産（外面）

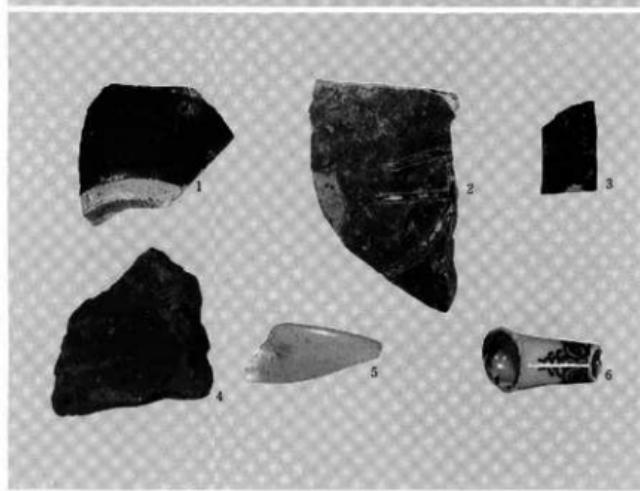


写真20 出土遺物6
相馬（外面）

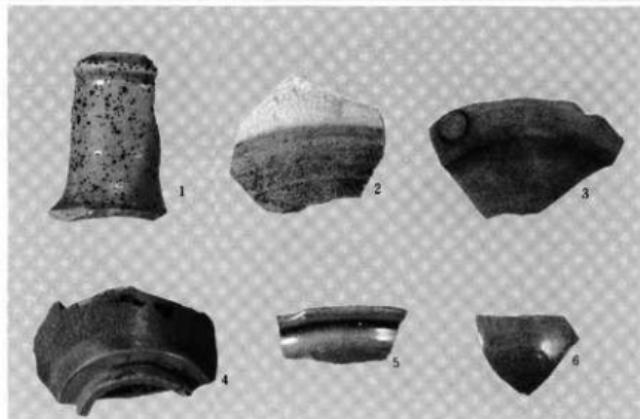


写真17 出土遺物 4
九州産（内面）



写真19 出土遺物 5
瀬戸
東北産（内面）

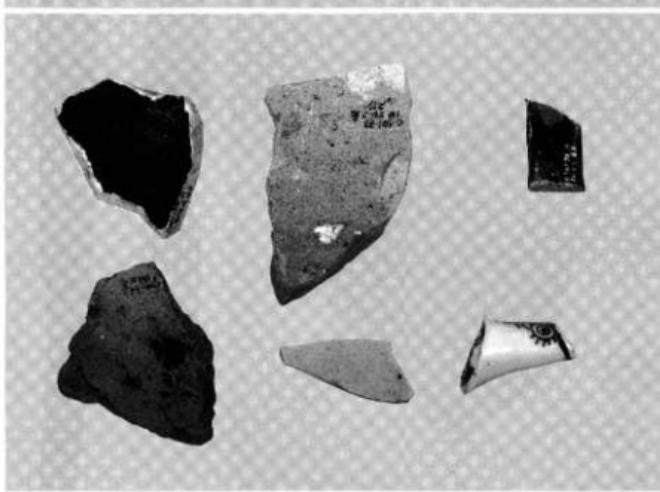
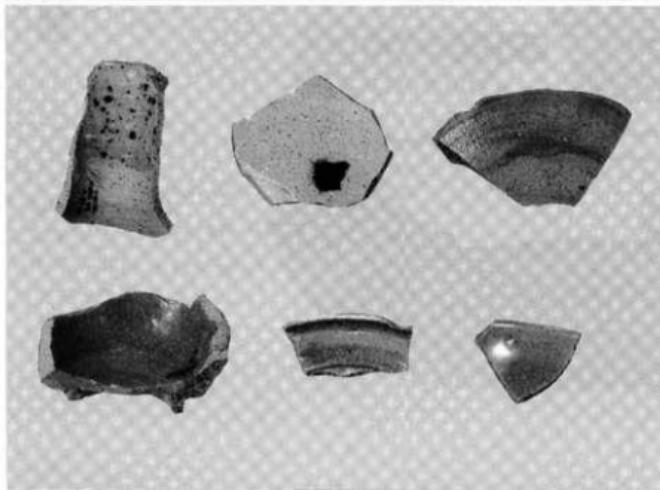


写真21 出土遺物 6
相馬（内面）



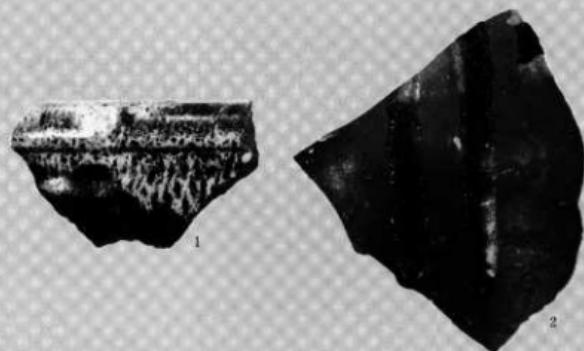


写真22 出土遺物7
堤(外面)



写真23 出土遺物7
堤(内面)



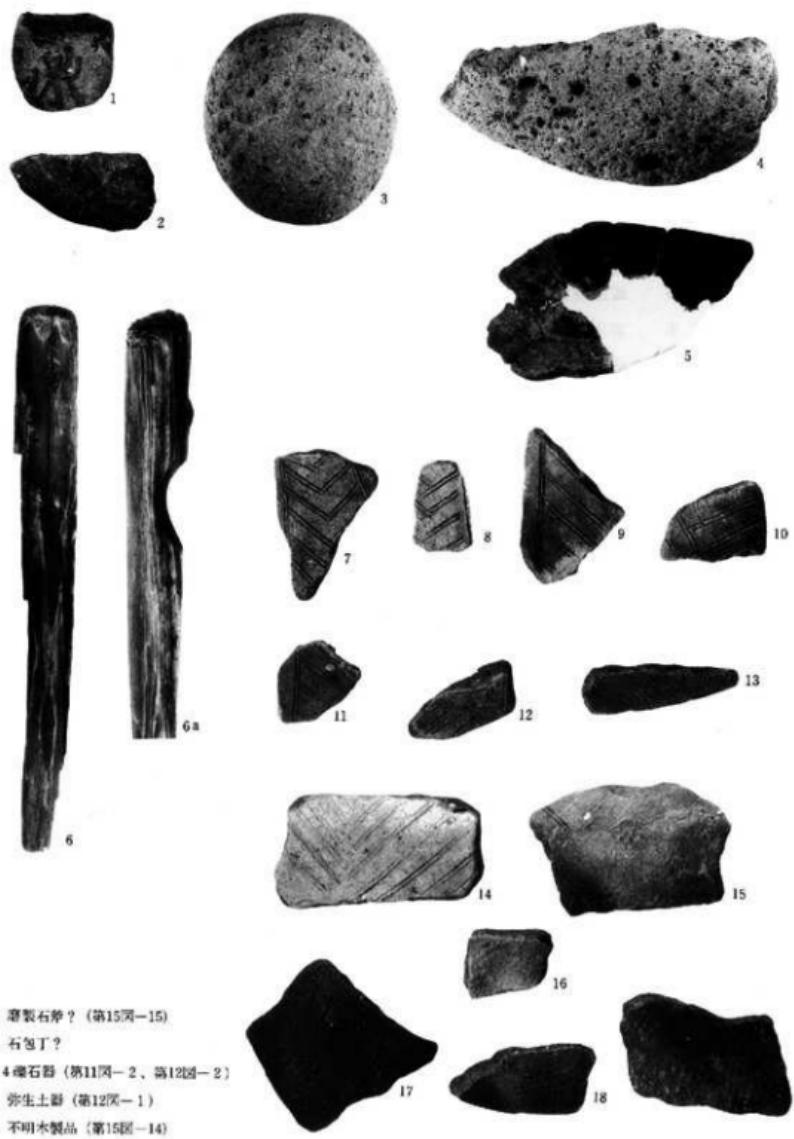
3. 桀足(第4図-1)

4・5 烟管(第4図-3・4)

6. 砥石(第4図-6)



写真24 出土遺物8



1. 磨製石斧？（第15図-15）
 2. 石包丁？
 3・4 磨石器（第11図-2、第12図-2）
 5. 弓生土器（第12図-1）
 6. 不明木製品（第15図-14）
 7～19. 弓生土器（第15図-1～13）

写真25 出土遺物9

職 員 錄

文化財課		調査係	調査係
課長	早坂春一	係長 佐藤 隆	主事 佐藤 良文
		主事 結城慎一	〃 長島 榮一
管理係		木村浩二	教諭 千葉 仁
係長	成田時雄	篠原信彦	〃 松本 清一
主事	岩沢克輔	太田昭夫	主事 及川 格
〃	山口 宏	佐藤 洋	〃 中富 洋
〃	白幡靖子	金森安孝	〃 平間 亮輔
		佐藤甲二	教諭 渡辺 広二
		吉岡恭平	上事 宮崎 明
教諭		小川淳一	〃 佐藤 淳
主事		工藤哲司	〃 松本 素明
〃		渡部弘美	〃 渡部 紀
教諭		橋本光一	〃 大江美智代
主事		主浜光朗	〃(併任) 工藤信一郎
		青野裕彦	

仙台市文化財調査報告書第117集
富沢遺跡
 — 第33次発掘調査報告書 —
 昭和63年3月

発行 仙台市教育委員会
 仙台市四分町3-7-1
 仙台市教育委員会文化財課
 印刷 株式会社 共新精版印刷
 仙台市日の出町2-4-2
 TEL 236-7181

